

「資料紹介」

『元姓家譜』(知念家)について

1) 崎原恭子

Brief Notes on A Genealogical Record of Gen Clan

Kyoko SAKIHARA 1)

概要

『元姓家譜』(知念家)は、令和四年度に金城清子氏より当館へ寄贈された資料であり、『氏集 首里那覇』(注1)の二番一三五に当たる(注2)。これまで、那覇市や沖縄県による家譜収集事業において実物が確認されていなかったもので、世系図に「首里之印」の朱方印が押された家格護の家譜である。元祖(立口)は、元開極・糸数知念親雲上庸忠から数えて三世の元國祥・知念子庸盈の長男・庸正である。庸正は四世と表記され、本家譜の世系図には十世まで記録されている。元姓の名乗頭は「庸」であるが、七世・庸泰の息子たち(八世)から名乗頭が「盛」に改められたことが記載されている。七世・庸泰の長男・盛演の本名が庸善、次男・盛記は庸嘉と注釈がついており、各人の記事には、「本名乗頭字庸たりといえども、字性悪敷により訟を奏して、盛に改む。これにより、以後盛の字を用いるなり。」と記されている。なお、七世・庸泰の三男・盛意には名乗頭に庸の字は記されていないので、盛意が生まれた一七九〇年までに訴えが認められたものと思われる。ちなみに、『氏集 首里那覇』の二番一三五の「元氏 仲嶺筑登之親雲上」とは、一世が共通している。二番一三五の方には、一世・庸忠の次男である元建勲・知念筑登之盛重が元祖(立口)で、二番一三五の四世・庸正から二世代前に相当するが、名乗頭に盛が使われている。実物資料の所在が不明なので確認できないが、後追いで名前が変更された可能性も想定される。

『元姓家譜』(知念家)の記録は、元姓の分家として四世の庸正・知

念筑登之親雲上の記事から始まっている。筑登之家の筋目であり、ほとんどの者が筑登之座敷(従九品)から黄冠に叙せられたことが記されている。記録中で最も高い位階に陞った者は八世・盛演で、一八二六年に勢頭座敷(従六品)に叙せられた。

元祖(立口)である四世・庸正(一六六四年生まれ)は、一六八〇年に元服後、一七三〇年に黄冠に叙せられたが、職歴がないまま一七四五年に亡くなっている。五世や六世も職歴はない。一方、七世・庸長(一七五五年生まれ)は、一七九五年に王府の道具を管理する御道具当筆者、一八一一年には野嵩御殿の取次や祭事を担当する野嵩御殿庫理大屋子となった。その弟である七世・庸泰(一七五八年生まれ)は、一七八二年に御番所御番筑登之となり、一七九三年には給地蔵筆者という各間切から集められる上納物を司る部署の役職を得たことから、国王より御玉貫一双を賀賜された。この兄弟の父親である六世・庸松の継室は士(サムレー)の表氏出身(玉寄仁屋娘)と記されており、本家譜中で初めて士出身の室(妻)が記録されている。この辺りの何らかの繋がりによって、息子たちに筆者等の勤めをもたらした可能性も考えられるが、他例を比較検討する必要がある。また七世・庸泰の長男である八世・盛演(一七八二年生まれ)は、一八一四年に御茶屋筆者、一八二一年に山奉行筆者、一八二六年に請地代官主取となった。その弟である八世・盛記(一七八六年生まれ)は、一八二七年に御番所御番親雲上となったが、その後の職歴はなく、一八六〇年に数え七十七歳で亡くなっている。ちなみに八世・盛演の長男である九世・盛昭(一八〇二年生まれ)は、一八三五年に大美御殿代官筆者となり、一八三八年には黄冠に陞ったが、それ以降は職歴等がなく、一八五一年に数え五十一歳で亡くなっている。さらにその弟である次男・三男はカタカシラを結った後、職に就かず

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

亡くなっている。また八世・盛演の長男や次男の室(妻)は士出身だが、弟の八世・盛記やその子は無系出身の室(妻)と記されている。長男筋とそれ以外の差、また世代が進むにつれて徐々に職から離れていく様子がかがえる。家を取り巻く人の繋がりや家格や、筋目・世代と職との関連が想定される。

なお九世・盛康の記事には、盛康以降の血筋に関する後世の書き込みがある(注3)。これには、盛康の子に長女・思鶴と長男・盛政という八つ違いの姉弟がいたこと、盛政が四歳の時に父・盛康が亡くなり(一八四六年)、叔父の盛昭(盛康の兄)に引き取られたが、九歳の時に叔父も死亡したこと(一八五一年)、二十三歳に達して久米村の仲本蕃長(蔡氏もしくは陳氏か)の三女マンツを妻に迎えて、長男・盛開と長女・ツルの二子をもうけたこと、盛政は五十八歳、マンツは五十歳で亡くなり、盛開が相続して十一世となったことが記されている。以上のことは紀元二五九四年(一九三四年)に元氏の十一世である比嘉盛珍が調査して記録したという。さらに、盛開の父である十世・盛政は、父・盛康の後を継いで首里市池端町に住み、四十一歳の時の一八八三年の戸籍法によって家督相続を登記したこと、久米村に移り住んだこと、妻マンツ死亡後に久茂地に移ってから死亡したこと、そして盛開が家督を継いで久米町に移り住んだことが記されている。本家譜の裏表紙に、赤鉛筆で「那覇市久米町二一六八 知念盛開」と書かれていることから、盛開によってこれらの追記がなされたと考えられる。また、方眼紙で表紙・裏表紙を仕立てたのも盛開と思われる。その他、散見される後世の書き込みも盛開によると想定される。

この「那覇市久米町二一六八」は、現在の那覇市久米二丁目付近となる。戦前の沖縄県立第二高等女学校から南方向に下ると、堂小屋敷と呼ばれる場所があり、現在この付近には「堂小 東寿寺跡」の石柱と小さな堂がある。東寿寺を堂小と呼んでいたようで、その周辺にあつた屋敷群が堂小屋敷と呼ばれていた。琉球王国時代には官職に就けず生活の糧に苦しんだ久米村人や、唐旅で働き手を失った末裔らが住んでいた場所だった(注4)が、近代には借家として利用されていたようである。寄贈者である金城氏の御家族の協力を賜って当時の様子をたずねたとこ

ろ、借家は寢床が八畳、四畳半の台所の間取りで、トイレは二世帯で一カ所使用していたという。本家譜は仏壇に保管されていたようだが、一九四四年の十・十空襲で住まいが焼失したそうである(注5)。寄贈者の金城氏は一九四四年九月頃に母親と二人で、先に移動していた兄がいた熊本県日奈久町(現在の八代市日奈久町)へ疎開したそうである(注6)。十・十空襲の後に父親と長女家族が疎開し、終戦の次の日に湯前(現在の湯前町)に引越したという。沖縄へ戻る際には長崎県の佐世保收容所に集まって過ごし、一九四六年十月頃に沖縄に引き揚げた後(注7)、インヌミ收容所(現在の沖縄市高原付近)で過ごし、知り合いのトラックに乗せてもらって那覇に戻り、那覇の農連市場付近に家を借りて戦後を過ごしたそうである。本家譜も家族と一緒に九州へ渡り(注8)、戦後引き揚げてきた後も大切に保管されてきたものである。

本家譜は琉球王国時代の知念家を知る資料であるとともに、家譜制度や家格等を示す貴重な歴史資料である。さらに、本家譜が現在に至る経緯は、沖縄の近現代を知る手がかりになることも記したい。

なお先に触れたように、本家譜の表紙・裏表紙は方眼紙で後補され、表紙中央には「元氏知念家譜」と縦書きされている。本紙の綴じ穴からすると、元は四ツ目綴じだったと考えられる。本紙の破れや虫損、折れ・しわ等もあるが、全体を通して中身を確認することができる。法量は縦二七・七cm、横一九・〇cm。本紙は二三紙。

『元姓家譜』(知念家)の翻刻及び読み下し文の作成に当たっては、次の凡例を用いた。

- ・人物名以外は当用漢字に改めるようにした。また、立項された人物名は太字で示した。なお五世・庸徳と六世・庸松、七世・庸長、八世・盛演の行間は詰まっているが、本稿では見やすくするため一行あけた。
- ・誤字は「ママ」と記して正字を「」で補った。また脱字も「」で補った。

- ・原文の注釈として小文字で記された文言について、読み下し文では(〜)で表記した。

- ・後世に書き足されたと考えられる文字(墨書・鉛筆書き両方あり)は省略した。

・読み下し文の年号は西暦に置き換えて、十干十二支は省いた。年をまたぐ場合には前年のままとした。

本家譜の翻刻及び読み下し文の作成に当たっては、当館の田名真之前館長より、不明の文字や記事全般、読み下し文の要領等に関して御教示を得た。記して感謝の意を表します。

(注1) 那覇市市民文化部歴史博物館『氏集 首里那覇』二〇〇八年

(注2) 『氏集 首里那覇』には、「元祖元開極系敷知念親雲上庸忠三世元國祥知念子庸盈支流長子元世爵知念筑登之親雲上庸正 元氏知念筑登之親雲上」と記載されている。

(注3) 書き込みは次のとおり。

九世盛康二長女思鶴長男盛政ノ二子有リ八ツ違ヒノ姉弟ナリ
盛政四才ノ時父盛康死亡ニ子幼独ノ身トナル叔父盛昭二介抱
サレナガラ九才ノ時叔父盛昭モ死亡シ全ク孤独トナル種族遺護
ノ天祐ニ因リ成長シ廿三才ニ達シテ久米村仲本蕃長ノ三女マン
ツヲ妻ニ迎ヘ世嗣盛開長女ツルノ二子ヲ生ミタリ斯克テ盛政ハ
四五十八才妻マンツハ五十才ニシテ死亡シ盛開相続シテ十一世
ニ及ベリ

紀元二千五百九十四年戊戌元氏十一世比嘉盛珍調査之ヲ記ス
十世盛政ハ父盛康ノ後ヲ継キテ首里市池端町五十三番地ニ居住
シ四十一才ノ時明治十六年五月廿七日戸籍法ニヨリテ家督相続
登記ヲナシ那覇久米村百四十番地内第三号屋敷ニ移リ此所ニテ
妻マンツ死亡其後久茂地二十一番地内第二十七号屋敷ニ移リテ
死亡セリ十一世盛開家督ヲ継ギ久米町二ノ六八番地ニ移ル紀元
二五九四年改住

(注4) 一般社団法人久米崇聖会『久米村マップ 歴史の散歩 古きをたずねて』二〇〇八年(二〇一四年第三版)

(注5) 一九四四年十月十日の早朝から午後までの九時間に渡って、米軍艦に搭載された飛行機のべ約一四〇〇機が奄美諸島から古・八重山諸島までの南西諸島全域を攻撃した。この空襲によ

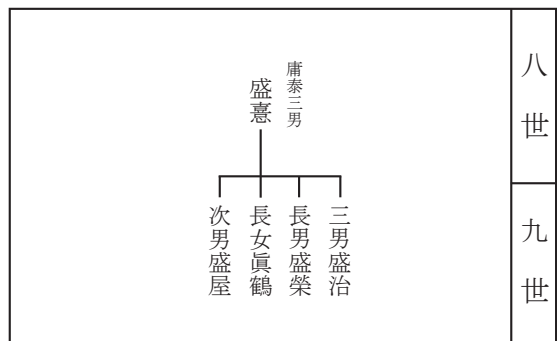
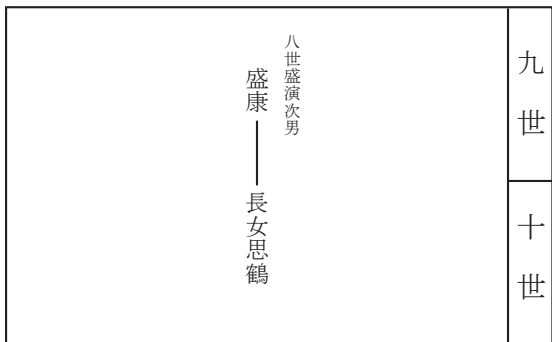
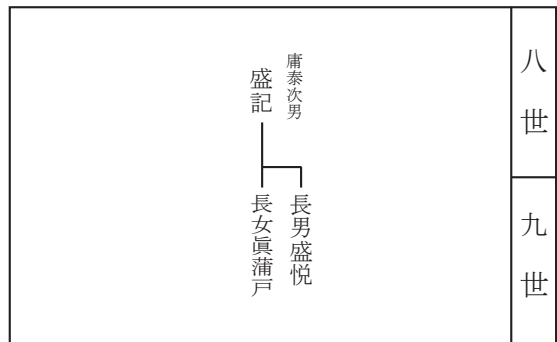
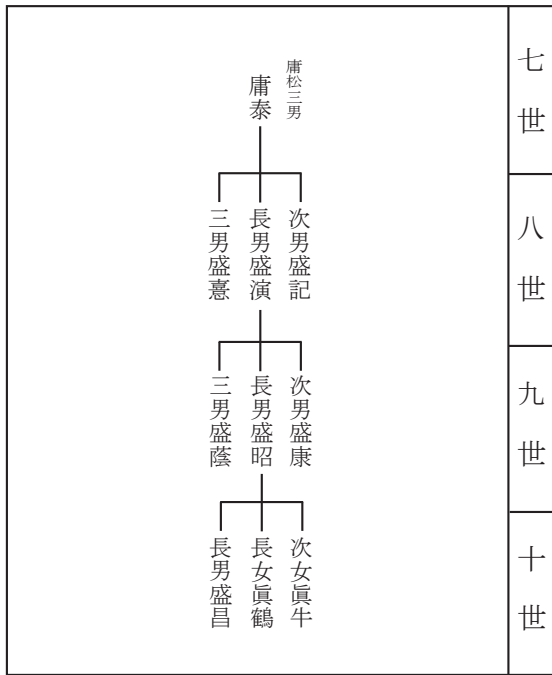
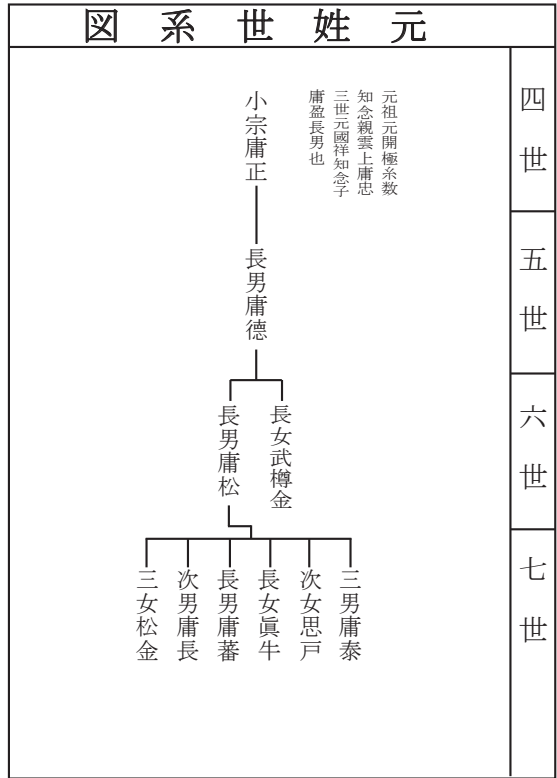
って、飛行場等の軍事施設や船舶・港湾施設等が破壊され、那覇の街の約九割が焼き払われた。

(注6) 金城氏は、疎開船名は覚えていないが、船内には入れずに甲板で過ごして白い布を頭に被り座らされていたそうで、一人二箱の荷物制限があつて布団・洋服・鍋・本を持って行ったそうである。また疎開船が鹿児島港に到着し、兄が迎えに来てくれて汽車で移動したそうである。

(注7) 引揚の際に乗った船の名前は覚えていないが、アメリカ人が操縦した船で、船内で過ごすことができたそうである。また引揚時には沖縄から持参した荷物を持ち帰ったが、現金は一人五百円までしか持ち帰れなかったので、別のものに交換したそうである。

(注8) 本家譜と同じく令和四年度に金城氏から御寄贈いただいた戸籍謄本(一九四一年四月十四日付、戸主は知念盛開)とともに、本家譜は疎開先の家に保管されていたそうである。なお疎開先では、金城氏と母親は病院の子ども部屋で寝泊まりし、父親と兄弟夫婦は製材所に住み込んでいたそうである。

元 姓 世 系 圖



元姓家譜支流

紀錄

四世庸正知念筑登之親雲上

童名松金唐名元世爵行一康熙三年甲辰四月五日生

父元開極糸數知念親雲上庸忠三世元國祥知念子庸盈崇禎五年壬申七月五日生康熙二十七年戊辰四月十七日不祿享年五十七号雲心

母眞壁間切新垣村無系保榮茂尔也女眞鍋生且不依康熙二十三年甲子九月十六日

死号月嶺

室久場川村無系石川尔也女眞牛生且不依乾隆四年己未九月二十二日死号茂室

長男庸德

尚貞王世代

康熙十九年庚申八月十八日結敬髻

尚敬王世代

雍正八年庚戌六月十四日叙黃冠

乾隆十年乙丑七月十二日不祿寿八十二号秋岳

五世庸德知念筑登之

童名思五良唐名元應德行一康熙二十六年丁卯七月二十八日生

父庸正

母無系眞牛

室西原間切小那霸村無系小橋川尔也女眞牛生且不依乾隆三十二年丁亥六月朔

日死号清蓮

長女武樽金康熙六十年辛丑二月二十七日生乾隆三十一年丙戌九月二十二日死享年四十六号

菊芳

長男庸松

尚貞王世代

康熙四十三年甲申八月十七日結敬髻

尚敬王世代

乾隆四年己未六月八日叙筑登之座敷

乾隆十年乙丑八月十八日不祿享年五十九号月秋

六世庸松知念筑登之親雲上

童名思龜唐名元大亨行一雍正二年甲辰六月十九日生

父庸德

母無系眞牛

室無系島袋筑登之親雲上女眞鶴後離別

長女眞牛乾隆九年甲子十一月五日生同三十二年丁亥十二月四日死享年二十四号梅吟

繼室表氏玉寄尔也貫亮女思加那康熙五十六年丁酉十二月七日生乾隆三十九年甲午

三月十一日死享年五十八号本園

長男庸蕃童名思德唐名元克温乾隆十四年己巳正月十八日生乾隆十九年甲戌十二月二十二日死

享年六

次女思戸乾隆十五年庚午十月二十三日生同年十二月二十日殤享年一

次男庸長因兄庸蕃早死奏 訟為嫡子

三男庸泰

三女松金乾隆二十七年壬午十一月二十五日生同三十年乙酉二月十六日殤享年四

尚敬王世代

乾隆五年庚申二月五日結敬髻

乾隆十三年戊辰六月十五日叙筑登之座敷

尚穆王世代

乾隆三十二年丁亥十二月七日叙黃冠

乾隆四十七年壬寅六月二十二日不祿享年五十九

七世庸長知念筑登之親雲上

童名思次良唐名元瑚行二乾隆二十年乙亥十月十八日生因兄庸蕃早死

道光十一年辛卯十二月奏 訟為嫡子

父庸松

母表氏思加那

尚穆王世代

乾隆三十六年辛卯十二月二十五日結敬髻

乾隆四十七年壬寅十二月朔日叙筑登之座敷

尚温王世代

乾隆六十年乙卯六月朔日為御道具当筆者

嘉慶五年庚申七月二十六日叙黃冠

〔尚灝王世代〕

嘉慶十六年辛未六月朔日為野嵩御殿庫理大屋子

嘉慶二十三年戊寅十二月十日不祿壽六十四

七世庸泰知念筑登之親雲上

童名樽金唐名元秉和行三乾隆二十三年戊寅十一月六日生

父庸松

母表氏思加那

室駱氏銘苻筑登之春章女真鶴乾隆二十四年己卯五月十三日生同五十八年癸丑二月

十九日死享年三十五号自安

長男盛演本名庸善

次男盛記本名庸嘉

三男盛意

尚穆王世代

乾隆三十八年癸巳十月三日結敬髻

乾隆四十七年壬寅六月朔日為御番所御番筑登之

乾隆五十八年癸丑十二月朔日為給地御藏筆者拝謝 朝廷之時恭蒙

聖上賀賜御玉貫一双原是御近習筆者勳故也

尚温王世代

嘉慶五年庚申七月二十六日叙黃冠

嘉慶七年壬戌八月四日不祿享年四十五号一峯

八世盛演雖為本名乘頭字庸因字性惡敷奏訟改盛自此以後用盛之字也

童名思龜唐名元秉勝行一乾隆四十七年壬寅十月二十三日生

父庸泰

母駱氏真鶴

室欽氏米須里之子親雲上清増女思戸

長男盛昭

次男盛康

三男盛蔭

尚温王世代

嘉慶元年丙辰五月十日結敬髻

尚灝王世代

嘉慶十五年庚午十二月朔日叙筑登之座敷

嘉慶十九年甲戌十二月朔日為御茶屋筆者叙黃冠

道光元年辛巳五月朔日為山奉行筆者

道光六年丙戌十二月朔日為請地代官主取叙勢頭座敷

道光十二年壬辰八月二十日不祿享年五十一号安心

八世盛記知念筑登之親雲上雖為本名乘頭字庸因字性惡敷奏訟改盛自此以後用盛之字也

童名眞蒲戸唐名元秉義行二乾隆五十一年丙午九月十三日生

父庸泰

母駱氏眞鶴

室真和志村無系金城尔也女眞鶴咸豐元年辛亥十月二十四日死享年五十九号安心

長女眞蒲戸嘉慶二十年乙亥五月十日生

長男盛悅

尚温王世代

嘉慶五年庚申八月八日結敬髻

尚灝王世代

嘉慶二十年乙亥十二月朔日叙筑登之座敷

道光七年丁亥六月朔日為御番所御番親雲上

咸豐十年庚申四月二十五日不祿壽七十七号壽峯

八世盛意雖為本名乘頭字庸因字性惡敷奏訟改盛自此以後用盛之字也

童名思次良唐名元秉吉行三乾隆五十五年庚戌十一月二十五日生

父庸泰

母駱氏眞鶴

室町端村無系澤岷筑登之親雲上女思加那

長女眞鶴嘉慶二十四年己卯閏四月二十日生

長男盛榮童名樽金唐名元按專道光七年丁亥八月十九日生同十八年戊戌四月五日賜〔殤〕享年

十一

次男盛屋 童名眞三 良唐名元按言 道光八年戊子十月九日生 同十四年甲午十一月十五日矢〔夭〕享年七

三男盛治 童名眞牛 唐名元按義 道光十年庚寅十月二十五日生 同二十三年癸卯二月十五日賜〔殤〕享年十四

尚瀨王世代

嘉慶九年甲子十一月二十五日結敬髻

道光四年甲申十二月朔日叙筑登之座敷

道光二十八年戊申五月十一日不祿 享年五十九号 廣得

九世盛昭

童名樽金 唐名元克興 行一 嘉慶七年壬戌五月十九日生

父盛演

母欽氏思戸

室向氏喜舍場筑登之親雲上朝昌女武樽金

長女眞鶴 道光六年丙戌三月十二日生

次女眞牛 道光八年戊子十二月七日生

長男盛昌 童名思龜 唐名元循禮 道光十四年甲午二月二十五日生 同十七年丁酉五月十三日夭 享年四

尚瀨王世代

嘉慶二十一年丙子六月十日結敬髻

道光六年丙戌十二月朔日叙筑登之座敷

尚育王世代

道光十五年乙未六月朔日為大美御殿代官筆者

道光十八年戊戌十二月朔日叙黃冠

咸豐元年辛亥二月十日不祿 享年五十一号 源心

九世盛康

童名思加那 唐名元克孝 行二 嘉慶十一年丙寅七月二十五日生

父盛演

母欽氏思戸

室翁氏城間里之子親雲上盛有女思戸

尚瀨王世代

長女思鶴 道光十五年乙未正月十五日生

嘉慶二十五年庚辰八月十日結敬髻

九世盛蔭

童名眞山戸 唐名元克達 行三 嘉慶十二年丁卯十二月二十日生

父盛演

母欽氏思戸

尚瀨王世代

道光元年辛巳三月十日結敬髻

道光二十一年辛丑正月八日不祿 享年三十五号 子本

九世盛悅

童名思加那 唐名元永全 行一道 光三年癸未十月八日生

父盛記

母無系眞鶴

尚育王世代

道光十七年丁酉五月五日結敬髻〔髻〕

同二十二年壬寅四月二十九日不祿 享年二十号 自心

九世盛榮

童名樽金 唐名元按專 行一道 光七年丁亥八月十九日生

父盛憲

母無系思加那

九世盛屋

童名眞三 良唐名元按言 行二 道光八年戊子十月九日生

父盛憲

母無系思加那

○読み下し文（世系図は省略する）

元姓家譜（支流）

紀録

四世庸正（知念筑登之親雲上）

童名は松金、唐名は元世爵、行一。一六六四年四月五日生まれ。

父は元開極系数知念親雲上庸忠の三世元國祥知念子庸盈（一六三二年七月五日生まれ。一六八八年四月十七日不禄す、享年五十七。号は雲心。）

母は眞壁間切新垣村の無系保榮茂尔也の女眞鍋（生日は不伝、

一六八四年九月十六日死す。号は月嶺。）

室は久場川村の無系石川尔也の女眞牛（生日は不伝、一七三九年九月二十二日死す。号は茂室。）

長男は庸徳

尚貞王世代

一六八〇年八月十八日、敲髻を結う。

尚敬王世代

一七三〇年六月十四日、黄冠に叙せられる。

一七四五年七月十二日不禄す、寿八十二。号は秋岳。

五世庸徳（知念筑登之）

童名は思五良、唐名は元應徳、行一。一六八七年七月二十八日生まれ。れ。

父は庸正

母は無系眞牛

室は西原間切小那覇村の無系小橋川尔也の女眞牛（生日は不伝、

一七六七年六月朔日死す。号は清蓮。）

長女武樽金（一七二二年二月二十七日生まれ。一七六六年九月二十二日死す、享年四十六。号は菊芳。）

長男は庸松

尚貞王世代

一七〇四年八月十七日、敲髻を結う。

尚敬王世代

一七三九年六月八日、筑登之座敷に叙せられる。

一七四五年八月十八日不禄す、享年五十九。号は月秋。

六世庸松（知念筑登之親雲上）

童名は思龜、唐名は元大亨、行一。一七二四年六月十九日生まれ。

父は庸徳

母は無系眞牛

室は無系島袋筑登之親雲上の女眞鶴（後に離別す。）

長女は眞牛（一七四四年十一月五日生まれ。一七六七年十二月四日死す、享年二十四。号は梅吟。）

継室は表氏玉寄尔也貫亮の女思加那（一七一七年十二月七日生まれ。一七七四年三月十一日死す、享年五十八。号は本園。）

長男は庸蕃（童名は思徳、唐名は元克温。一七四九年正月十八日生まれ。一七五四年十二月二十二日死す、享年六。）

次女は思戸（一七五〇年十月二十三日生まれ。同年十二月二十日殤す、享年一。）

次男は庸長（兄庸蕃早死により、訟を奏して嫡子となる。）

三男は庸泰

三女は松金（一七六二年十一月二十五日生まれ。一七六五年二月十六日殤す、享年四。）

尚敬王世代

一七四〇年二月五日、敲髻を結う。

一七四八年六月十五日、筑登之座敷に叙せられる。

尚穆王世代

一七六七年十二月七日、黄冠に叙せられる。

一七八二年六月二十二日不禄す、享年五十九。

七世庸長（知念筑登之親雲上）

童名は思次良、唐名は元瑚、行二。一七五五年十月十八日生まれ。兄庸蕃早死により、一八三一年十二月、訟を奏して嫡子となる。

父は庸松

母は表氏思加那

尚穆王世代

一七七一年十二月二十五日、敬髻を結う。

一七八二年十二月朔日、筑登之座敷に叙せられる。

尚温王世代

一七九五年六月朔日、御道具当筆者となる。

一八〇〇年七月二十六日、黄冠に叙せられる。

〔尚灝王世代〕

一八一一年六月朔日、野嵩御殿庫理大屋子となる。

一八一八年十二月十日不禄す、寿六十四。

七世庸泰〈知念筑登之親雲上〉

童名は樽金、唐名は元秉和、行三。一七五八年十一月六日生まれ。

父は庸松

母は表氏思加那

室は駱氏銘苺筑登之春章の女眞鶴（一七五九年五月十三日生まれ。

一七九三年二月十九日死す、享年三十五。号は自安。）

長男は盛演（本名は庸善）

次男は盛記（本名は庸嘉）

三男は盛憲

尚穆王世代

一七七三年十月三日、敬髻を結う。

一七八二年六月朔日、御番所御番筑登之となる。

一七九三年十二月朔日、給地御蔵筆者となる。朝廷に拝謝の時、恭

しく聖上御玉貫一双を賀賜せらるるを蒙る（原是御近習筆者勤めの故

なり。）。

尚温王世代

一八〇〇年七月二十六日、黄冠に叙せられる。

一八〇二年八月四日不禄す、享年四十五。号は一峯。

八世盛演（本名乗頭字庸たりといえども、字性悪敷により訟を奏して、

盛に改む。これにより、以後盛の字を用いるなり。）

童名は思龜、唐名は元秉勝、行一。一七八二年十月二十三日生まれ。

父は庸泰

母は駱氏眞鶴

室は欽氏米須里之子親雲上清増の女思戸

長男は盛昭

次男は盛康

三男は盛蔭

尚温王世代

一七九六年五月十日、敬髻を結う。

尚灝王世代

一八一〇年十二月朔日、筑登之座敷に叙せられる。

一八一四年十二月朔日、御茶屋筆者となり、黄冠に叙せられる。

一八二一年五月朔日、山奉行筆者となる。

一八二六年十二月朔日、請地代官主取となり、勢頭座敷に叙せられる。

一八三二年八月二十日不禄す、享年五十一。号は安心。

八世盛記（知念筑登之親雲上。本名乗頭字庸たりといえども、字性悪

敷により訟を奏して、盛に改む。これにより、以後盛の字を用いる

なり。）

童名は眞蒲戸、唐名は元秉義、行二。一七八六年九月十三日生まれ。

父は庸泰

母は駱氏眞鶴

室は真和志村の無系金城尔也の女眞鶴（一八五一年十月二十四日死

す、享年五十九。号は安心。）

長女は眞蒲戸（一八一五年五月十日生まれ。）

長男は盛悦

尚温王世代

一八〇〇年八月八日、敬髻を結う。

尚灝王世代

一八一五年十二月朔日、筑登之座敷に叙せられる。

一八二七年六月朔日、御番所御番親雲上となる。

一八六〇年四月二十五日不禄す、寿七十七。号は壽峯。

八世盛憲（本名乗頭字庸たりといえども、字性悪敷により訟を奏して、盛に改む。これにより、以後盛の字を用いるなり。）

童名は思次良、唐名は元秉吉、行三。一七九〇年十一月二十五日生まれ。

父は庸泰

母は駱氏眞鶴

室は町端村の無系澤岬筑登之親雲上の女思加那

長女は眞鶴（一八一九年閏四月二十日生まれ。）

長男は盛榮（童名は樽金、唐名は元按專。一八二七年八月十九日生まれ。一八三八年四月五日殤す、享年十二。）

次男は盛屋（童名は眞三良、唐名は元按言。一八二八年十月九日生まれ。一八三四年十一月十五日夭す、享年七。）

三男は盛治（童名は眞牛、唐名は元按義。一八三〇年十月二十五日生まれ。一八四三年二月十五日殤す、享年十四。）

尚瀨王世代

一八〇四年十一月二十五日、敲髻を結う。

一八二四年十二月朔日、筑登之座敷に叙せられる。

一八四八年五月十一日不禄す、享年五十九。号は廣得。

九世盛昭

童名は樽金、唐名は元克興、行一。一八〇二年五月十九日生まれ。

父は盛演

母は欽氏思戸

室は向氏喜舎場筑登之親雲上朝昌の女武樽金

長女は眞鶴（一八二六年三月十二日生まれ。）

次女は眞牛（一八二八年十二月七日生まれ。）

長男は盛昌（童名は思龜、唐名は元循禮、一八三四年二月二十五日生まれ。一八三七年五月十三日夭す、享年四。）

尚瀨王世代

一八一六年六月十日、敲髻を結う。

一八二六年十二月朔日、筑登之座敷に叙せられる。

尚育王世代

一八三五年六月朔日、大美御殿代官筆者となる。

一八三八年十二月朔日、黄冠に叙せられる。

一八五一年二月十日不禄す、享年五十一。号は源心。

九世盛康

童名は思加那、唐名は元克孝、行二。一八〇六年七月二十五日生まれ。

父は盛演

母は欽氏思戸

室は翁氏城間里之子親雲上盛有の女思戸

長女は思鶴（一八三五年正月十五日生まれ。）

尚瀨王世代

一八二〇年八月十日、敲髻を結う。

一八四六年三月十日不禄す、享年四十一。号は得心。

九世盛蔭

童名は眞山戸、唐名は元克達、行三。一八〇七年十二月二十日生まれ。

父は盛演

母は欽氏思戸

尚瀨王世代

一八二一年三月十日、敲髻を結う。

一八四一年正月八日不禄す、享年三十五。号は子本。

九世盛悦

童名は思加那、唐名は元永全、行一。一八二三年十月八日生まれ。父は盛記

母は無系眞鶴

尚育王世代

一八三七年五月五日、敲髻を結う。

一八四二年四月二十九日不禄す、享年二十。号は自心。

九世盛榮

童名は樽金、唐名は元按專、行一。一八二七年八月十九日生まれ。

父は盛憲

母は無系思加那

九世盛屋

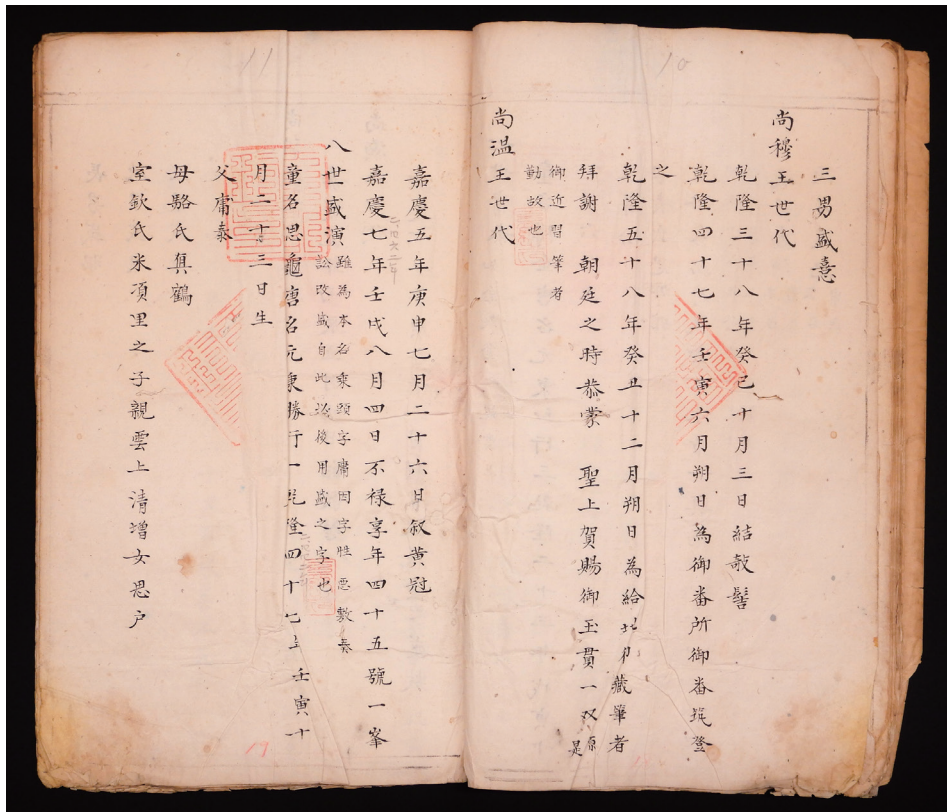
童名は眞三良、唐名元按言、行二。一八二八年十月九日生まれ。

父は盛憲

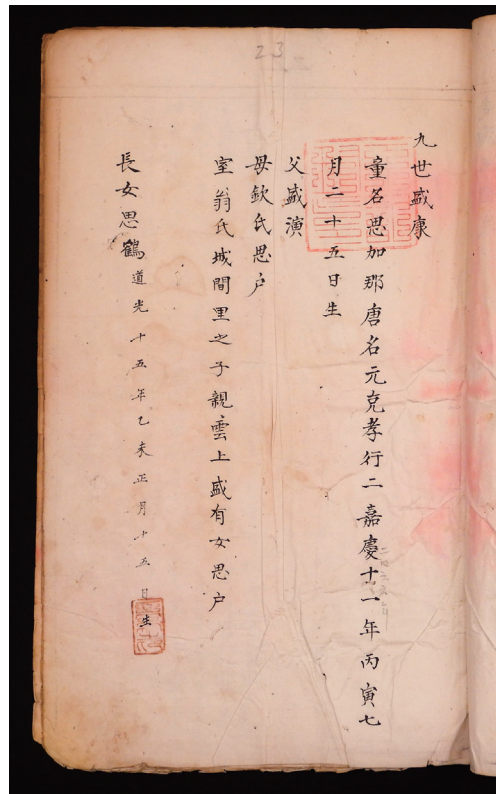
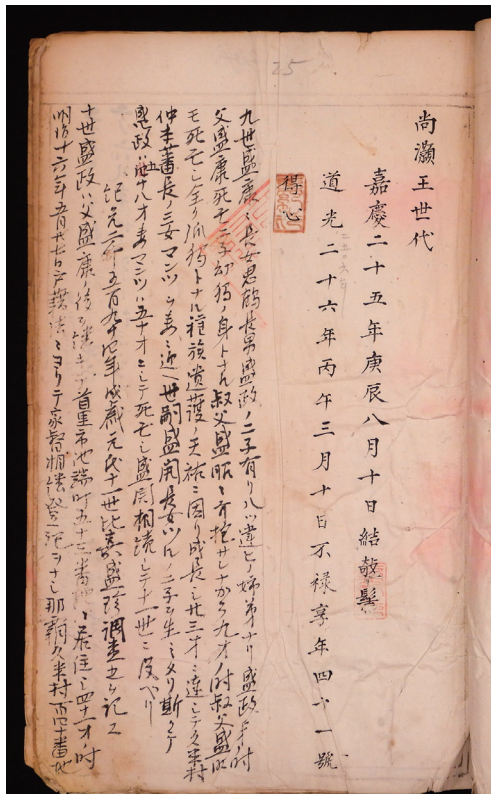
母は無系思加那



「元姓世系圖」(部分)



左頁の八世・盛演の名前の下に、名乗頭を「庸」から「盛」に改めることの注釈がある。



九世・盛康の記事の後ろに、十一世・盛開によって追加されたと思われる書き込みがある。